
現代怪奇異聞録 ~ 真は呼びもしないのに ~

大城秀一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代怪奇異聞録 ～真は呼びもしないのに～

【NZコード】

N9246F

【作者名】

大城秀一郎

【あらすじ】

能輪真は、ある変わった才能を持っていた。しかし、本人はそれに気が付いていなかつた、その才能とは『困っているモノ』を『引き寄せる才能』であった、そんなこんなで真は望みもしないのに、様々な事件に巻き込まれていくのであった。

序章 能輪真

能輪真は、まだ高校生でありながら、かなりの現実主義者リアリストで、そして人生をやや達観した所のある青年であった。

基本的に彼は心靈現象やその類を信じてはいない、ある意味ではそういう存在がいてもいいとは思うが、それを目の前で見たわけではない上に、見たという人間やテレビでの扱いを見る限り、それに対して信憑性を感じないのである。

テレビがそういう心靈特集をするのは、人間が心の奥底に「怖い物に惹かれる」という部分を突いて視聴率を稼ぎたいのだと思うし、幽靈や何かについて語る人は全員がそうではないとは思うが、それなりに胡散臭い商売に手を染めていて、儲ける為に人が見えないものを見えるように言つてているのだと考えている。

だからと言つて、クラスで友人が「あそこには幽靈が出る」という話をしても「馬鹿らしい幽靈なんて、いる訳無いじゃないか」と声をあげて否定はしない、いない物を証明することの方が遙かに大変だと思っているからだし、目に見えている物が全て真実ではないと思う節があるからである。

UFOも別に否定はしない、広大な宇宙で生命体が地球にしか存在しないと考える方が視野が狭いような気がするし、だからといって、地球上にやつてくる宇宙人が同じような『人型』ではないだろうとも思う部分がある（もちろん形がまったく違う目撃例もあるが）。そんな彼であるが、誰にも言つていらないが実は心靈的な体験をした事がある。

といつても、正確には、彼が産まれる前になので、彼自身にその記憶があるわけではない。

彼がまだ母親のお腹の中にいる頃の話である。

まだ出産予定日には1～2週間程度の余裕があり、彼の母親が少しづかり気晴らしに近所を散歩していた時の事である。

それは急に訪れた。

猛烈な激痛を伴つた腹痛であったという、まるで何かに腹部を食いつかれるかのような痛み、あまりの痛みに声すら発せられなかつたほどである。

母親は携帯電話を持ち歩いていたが、そのとんでもない激痛に携帯電話を取り出す事すら出来なかつた、しかも、不運にも周りには人が誰もいなかつた。

陣痛！？

母親は真が初めての子供であった為、それが陣痛なのか、それとも別の痛みなのかの判断が出来なかつた、それにどちらにしても、もう蹲るくらいしか行動の選択肢が無いような状況であつた。

息を吸うのも痛かつた。

息を吐くのも苦しかつた。

今までの経験の中でトップクラスの痛みが、両足が同時に攣つたという経験だけだった母親だが、それと比べものにならないほどの痛みを感じていた。

絶望感と激痛とで母親が意識すら遠くなりかけていた時、急に声が聞こえたのだといふ。

「おやおや、どうなさつたのかね」

それは、実に穏やかな口調であつた、声の口調からしてやや高齢の男性のように聞こえたといふ。

その言葉に対して、返事すら出来ずに脂汗を流していた母親は、声を掛けてくれた人に必死に救急車を呼んでと伝えようとしたが、そうする前にその老人は、母親の手首に親指と小指以外の三本を当てて何かを探るようにしたかと思つと、すぐに。

「これはいけないね」

その声の主は、そつまつと、掌をポンと軽く母親の腹に当てたのである。

決して強い力ではない、本当にただ触れただけである。しかし、奇妙なほど温かさを感じた掌だったという、何というか機械的な熱

ではなく、太陽のようなそんな暖かさを感じたのだという。

その瞬間に、まるで嘘のように痛みは四散し、一気に汗も引いたのだった。

まるで、そこにあつた痛みの元を消し飛ばしたかのように、あつと/or>いう間の出来事だつた。

母親は声の主の方を向き直り、初めてその容姿を見たのだが、年齢は70歳以上だろうか、かなりボロの作務衣のような、法衣のような格好をした老人であった、老人ではあるのだが背筋は真っ直ぐに伸び、歯は外から見える限りほとんど自前のように見えた。

何というか、自分の住む家があるのか無いのか分からないが、少なくとも自分のやつていること生き方に対しても少しも引け目も後悔も無く、むしら誇りといふか楽しみすら持つて人生を満喫している、そんな風に思える雰囲気を持つていたという。

顔には、まるで向日葵のような、にこやかな笑みが浮かんでいたという。

その表情が無ければ、あまり人に好かれるような格好では無いかもしれないが、どちらにしても今は命の恩人とすら思える相手である、失礼に値するかもしれないが謝礼金を払つても構わないと思つていた。

「助かりました、急に痛みだして……。本当に……本当に、ありがとうございました」

母親は、やや涙すら浮かべて礼を言つた。

それほどの激痛だったのである、それから救つてもらえたという事実が、言葉に出来ないほどの感謝を感じさせたのである。

すると、老人は奇妙なことを言つた。

「誰かに呼ばれたと思ってね、気のせいかと思ったが、どうやらお腹の息子さんに呼ばれたようだね。中々変わった才と運命を持った息子さんですね。仏道を学べば面白くなるやも知れないが、本人が望まなければ何にもならんかな」

そう言つと、かつかつかとまるで水戸黄門のように声を挙げて笑

いながら去つて行つたという。

心の底から楽しそうな笑い声が聞こえなくなつてから、母親はハツとした、その後姿に思わず相手の名前も連絡先も聞きそびれてしまつていたのである、その後に父親にもその話をして、きちんと礼をしたくて探したのだがどうしても見つからなかつたといつ。

少なくとも近所に住んでいる老人ではないようであった。

この話の中で母親が特に不思議に思つたのが、父親と話し合つて産まれるまで性別を知らないでおこうと決めていて、自分でやらお腹の中にいる子供が男だと分からなかつたのに、その老人が『息子』と断定している所であつたといつ。

真からすれば、男か女かなど50%の確率だし、ありえない話ではないとは思つているのだが……、不思議な体験といえば不思議である。

そういう事があつたから、真は母親には事ある』といふ。

「あんたはやれば出来るのよ、あなたが産まれる前にね……」

という話を何度も何度も聞かされている。

父親にその話の真偽を尋ねてみたところ。

「俺がその場にいた訳ではないから何とも言えないが……、少なくとも母さんとお前を救つてくれたのは事実だからその人には感謝しているよ。お前にどういう才能があるは分からぬが、これから努力して何か自分のやりたい事を見つけると良い、無理にお坊さんになれとは言わないよ」

とやや笑いながら言つた。

母親の作り話では無いようだが、だからと言つてその不思議な老人が正しいことを言つたかどうかは分からぬ。

少なくとも今の今まで自分に非凡な才能や運命を感じた事は一度も無い。

成績にしても運動にしても、落ちこぼれてはいないが、トップであつた事はない。

特技も大して誇れる物はない。
仏教とかにも別に興味がない、宗教 자체にあまり関心を持つていないのである。

能輪真はこの時、自分がどれほどの運命に巻き込まれつづるのか、当たり前だが、今はまだ予感すら感じていなかつたのである。彼が始めて遭遇する奇々怪々な事件は、もう直ぐそこまで迫っていた。

序章 能輪真（後書き）

かなり久しぶりの作品ですので、ついでに改名もしてしまいました。
読んでくれたら幸いです。
のんびり更新していきます。

K県、
御巡町。
みめぐらちょう

都心へは電車で一本、30分もすれば行けるが、それほど発達もしておらず、かといって田舎というわけでもない街である。

この平和な街で、異変は静かに、しかし確實に始まつていた。この事件の始まりは、一人の男が早朝意識を失い道に倒れている所を、警察に保護された事から始まる。

当初発見した警察官は、その男の衣服と口臭から僅かにアルコール臭が漂つていたので、ただの泥酔者が眠り込んでしまつた物と考えたのだが、どうにもその様子がおかしい事から、その男はそのまま病院に連れられ、検査を受けることとなる。

本来ならば『トラ箱』と呼ばれる、泥酔者用の拘置所に放り込まれるのだが、異例の事であつた。

検査の結果、アルコールを摂取した反応は確かにあるが、酩酊に至るほどの量ではなく、もちろん個人差もあるだろうがとても意識を失うほどの量ではないと診断された、だが、その検査の際も男は意識を取り戻さなかつた。

意識が無いまま、様々な病気を疑い、脳の精密検査やらなにやら行つたのだが以上はまったくなく、ただ眠つてているだけであつた。

所持品からその身元が判明した。

男の名前は徳井道夫、24歳。 実家に両親と共に暮らしており、その両親に確認した所、昨夜は地元の友人達との同窓会が開かれており、それに出席すると聞いていたという、今朝になつても帰つて来なかつたが、飲み会の後にそのまま遊びに行つたりすることもあつたので、両親は特に心配していなかつたといつ。

結局、徳井道夫は、丸3日間意識を失つたまま、器質的にも機能的にもその状態に何の異常も見られず、ただ意識だけ取り戻さない

だけという、その謎の症状に医者は頭を悩ませていた、とりあえずは様子を見ると言つ事で入院させて、観察を続けることになった。だが、唐突に徳井道夫は眼を覚ました。

4日目の朝のことである、徳井道夫はいつもの朝のように眼を覚まし、自分が今いる場所が病院である事に気が付いたが、何故自分がここにいるのか分からず困惑した。

医者が尋ねても、警察が尋ねても、家族が尋ねても、何故自分が意識を失ったのか覚えていないという、そして体にはどこにも違和感が無く、ただ丸々3日以上も寝たままだったので、体中が重いということだけである。

いや違う。

肉体的に違和感がないのだが、何かを失ってしまったような強烈な喪失感を徳井道夫は味わっていた。

医者や警察と話している時も、意識せずに何故か涙が頬を伝わるのである、それを見て警察官も「何か隠しているのなら話なさい」という姿勢で対話が続いたのだが、徳井道夫には何故自分が泣いているのか分からぬ、分からない物は説明も出来ない。

「それで、徳井さん。 今のあなたの、その感情はどういう気分なのかな？」

「清々しさがある、奇妙だけれど、心にあつたわだかまりというかそういうのがそつくりそのまま胸の中から消え去ったような……、そんな気分だ」

「清々しいのなら、結構な事じゃないか？」

「いや……、人は忘れる事で前に進めるけど、記憶の中でも絶対に忘れちゃいけない事があるんだと思う。それを忘れられたらどれだけ幸せだろうと思つても、忘れてしまつたら今まで忘れずに頑張ってきた事全てを侮辱するような、俺の人生の一部が勝手に書き換えられたような、そんな苛立ちもあるんだ……」

「なるほどね、癌で内臓が犯されて、その病を取る為に内臓そのものをほとんど摘出してしまったような、そんな気分なのかな？」

「……ああ、それに近いと思う」

「そうか、分かった、ありがとう。後はあなたが何を見たか、聞いたか、それを確認しておきたい」

「それはまったく覚えてないって言つたはずだ」

「それは意識の中の話だけな。あなたが意識を失つた時、必ず何かを聞いたはずなんだ。よく思い出しても、よくね」

「ああ……。そういえば、誰かの会話が聞こえた気がする」

「会話？」

「でも俺には一人の声しか聞こえなかつた、電話でもしてたのかな？　そういえば声は大人の男の声には聞こえなかつたような気がする……」

「なるほど、それだけ分かれば十分だ。最後に一つ」

「なんだよ」

「”あなたは今まで誰と話をしていた？”」

「あ？　俺は誰とも話していないよ、一人でぼおつと外を見ていた

」

「そう、あなたは誰とも話していない……」

病室のベッドに座つている徳井道夫は、今日で退院（というか病氣でも何でもないと診断され、心療内科を紹介されたのだが）するベッドに腰を掛けて、ぼおつとしていた。

今、誰かと話をしていたような気がするが、夢を見ていたような気もある。白昼夢という奴だろうか。

だが、そういう夢などどうでも良いくらい、心の喪失感は癒されない、これから何年経てばこの空白は埋められるのだろうか、これが例えば恋人を失つたというのならば、その悲しみは深いだろうが時間と共に新しい恋人も出来て空白が埋められる事もあるかもしれない

ない、だが、自分が何を失つたのかも分からぬのなら、一体どうすればその空白を埋めれば良いのだろうか。

まるで、長年恨み続けていて、自分でその命を奪おうと心に決めた宿敵が、自分とまったく関係の無い所で事故死してしまったような、そういう喜んで良いのか、悲しんで良いのか分からないそういう状況に似ているかも知れない。

徳井道夫の両目からは、気を抜くと未だに涙が流れてくる。
傷ついてはいない、ただ失っただけだ。

そして、その失った物が何なのか分からぬだけだ。

この奇妙な事件の最初の”被害者”、徳井道夫の話はここで終わる。

「この街に何がいるのは確かだが……、まだはつきりしないな。
探索を続けるしかない。 それにしてもこの街に漂う氣配、これは尋常じゃない。 もしかしたら、3つの内の1つと遭遇する可能性もあるのか……」

闇に潜む何かが、そうポツリと呟いた。

声の主は誰だか分からない、だが、その声から分かるのは、得体の知れない事件に”犯人”と呼べる存在がいると呟つ事、そしてその相手に對して決して探索の手を緩めないと覺悟であった。

だがこの声の主の覺悟とは裏腹に、この後、事件は1週間の間に、立て続けに5件も起ることとなるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9246f/>

現代怪奇異聞録 ~ 真は呼びもしないのに ~

2010年10月10日05時06分発行